国民高等学校（フォルケホイスコーレ）と満蒙開拓
―加藤完治と賀川豊彦のデンマーク受容―

中　丸　禎　子*

1. 研究の背景と問題提起

本稿では、日本における北欧受容研究の一環として、加藤完治（1884-1967）と賀川豊彦（1888-1960）の国民高等学校受容と満蒙開拓の関係を論じる。

「国民高等学校」とは、デンマークのニコライ・グロントヴィ（Nikolaj Grundtvig, 1783-1872）の理念に基づき、クリステン・コル（Christen Kold, 1816-70）が制度として確立した成人教育機関folkehøjskole（字義的には「民衆（folke）のための高等（høj）学校（skole）」）の大正・昭和期の日本における名称である。1990年代以降はデンマーク語をカタカナ書きした「フォルケホイスコーレ」という名称で、「試験というものを絶対にせず、単位や資格の付与もなく、教師と学生が寮で共同生活をし、書物よりも対話を中心に、生そのものを学び、社会性を自覚する」「『生のための学校』『自由学校』とも呼ばれ」「満十七才半以上の人なら、性別、年齢、障害の有無、国籍を問わず、誰でも入学でき」「授業や討論、実践、実習、生活を通して、自己発見をし、これから生きる自分の道を探すことに力点がおかれています」（清水 1996:21）、「民主主義的思考を育てる場」「知の欲求を満たす場」「人生のどんな場面においても、自分を見つけ出すために人々が向かう場所」「多種多様な個性が惜しみなく生かされる社会」（IFASホームページ）と紹介される。（以下、日本の大正期・昭和期の文脈では「国民高等学校」、デンマークにおける同校および同校についての一般的な記述では「フォルケホイスコーレ」と表記する。）近代日本においてしばしば、「北欧」は理想・模範として受容され、このイメージは、たとえば「世界幸福度指数」（World Happiness Report 2021）に見られるような「幸せな北欧」イメージに引き継がれている。国民高等学校/フォルケホイスコーレもまた、理想的・模範的な学校として紹介・導入され、「幸せな北欧」イメージを形成するとともに、そのイメージに支えられてポジティヴに評価される「北欧」の一つである。

日本における北欧受容に大きな役割を果たしたのがキリスト教系知識人である。国民高等学校については特に、内村鑑三（1861-1930）の影響がしばしば挙げられる。内村は、『デンマルク国の話』（講演・雑誌掲載 1911、単行本 1913）において、デンマークが第二次シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン戦争（1864）でプロイセンとオーストリアに敗戦し、シュレスヴィヒ＝ホルシュタインを割譲した後、工兵士官のエンリコ・ダルガス（Enrico Dalgas, 1828-94）とその長男がユトランド半島の荒れ地に植林をすることで国力回復・増進を果たしたという逸話を紹介する。この逸話は、内村の「樹を植ゑよ」（1924）、「西洋の模範国デンマルクに就て」（1924）でも紹介されたほか、戦後に岩波文庫『後世への最大遺物』（1946）に併催され、小学校の国語教科書にも収録される（窪田・木村 2016）など、デンマークのイメージとしてよく知られるもののひとつとなった。小山哲司は、内村の影響とトルストイの流行が「理想

＊東京理科大学・准教授

の農業国 デンマーク」ブームを引き起こしたこと、その十数年後に内村自身がフォルケホイスコーレに関心を抱き、渡瀬寅次郎（1859-1926）の遺志による興農学園の設立（1929。1933年久連（くづら）国民高等学校、1942年農道塾に改称、1943年閉校）に尽力したこと、同校の設立・運営に助言者として加藤完治、校長として平林広人（ひろんど）（1886-1986/メソジスト派。1917年に信濃通俗大学会を設立、1924年にフォルケホイスコーレに留学。デンマーク語を修得し、デンマークに関する著作のほか、アンデルセンの翻訳も手掛けた）、講師として松前重義（1901-91/内村の弟子。逓信省勤務。ドイツ留学中の1934年、デンマーク各地のフォルケホイスコーレを視察。1936年、フォルケホイスコーレをモデルに望星学塾を創立。同塾は1946年に航空科学専門学校・電波科学専門学校を前身として創立された東海大学の原点とされる）や賀川豊彦が関わったことを指摘し、グロントヴィ（グルントヴィ）から内村に至る「神を愛し、人を愛し、土を愛す」の「三愛精神」が、フォルケホイスコーレの活動を通じてデンマークおよび日本の現代に息づくと主張する。小山は、加藤がキリスト教から古神道に「転向」し、満蒙開拓を推進したことにも言及する。そして、興農学園の玄関に賀川の書「神を愛し、隣人を愛し、国土を愛す」が掲げられていたことを挙げ、その由来としてホルマン『国民高等学校と農民文明』に掲載されたコル（コールド）の「本校は国民に神、隣人、祖国を愛することを教へんと欲する」を引用する。コルの「神、隣人、祖国」が、賀川において「神、隣人、国土」、現在の三愛精神において「神、人、土」となったこと、特に三番目の変容に「この言葉に関わった人々の思いが込められている」とし、「加藤完治ら当時の農本主義者たちの方向は、キリスト教に立脚した久連国民高等学校とは大きく変わっていきます。加藤らは、キリスト教の神を日本古来の神道の神とし、隣人とは日本人、そして、祖国とは、天皇を中心とした皇国日本であると三愛精神の中味を変えていきます。」「久連国民高等学校はキリスト教に立脚する立場から、『祖国』の中心は天皇を中心とした『皇国日本』ではなく、我々が生活の場とする『国土』であると考えて否を唱え」「『国土』の本質は、我々の命の糧を育む『土』であるという観点から、現在の三愛精神の形に落ち着いたのではないか」と、「祖国/国土/土」に対する賀川・内村らキリスト教陣営と加藤ら農本主義陣営の解釈を対照する。（小山2000:3）

清水満は、日本とデンマークの農村・地主制度のあり方の違いを挙げ、農本主義者による国民高等学校受容が、「英米独の文献経由でなされたため、根本的にグルントヴィとフォルケホイスコーレの思想が理解されないまま」「フォルケリーヘズはたんなる国粋主義、ナショナリズムとされ、徴兵制と義務教育をその根幹とする近代の国民教育一般へと同置された」と批判し、その代表格として山崎延吉（1873-1954）と加藤を批判的に取り上げる。山崎は愛知県安城市の県立農林学校（現:安城農林高校）の校長として、後に日本丁抹（デンマーク）と呼ばれる同地域の振興に努めた。その理論は「天皇制を統合原理とし、地主制の矛盾に触れず、地方を明治国家中央集権体制に再編成した地方行政組織と教育制度」を前提とした「お粗末」なものだが、「農業実践からの農民プラグマティズムに立ったため、その点がたんなる官製農村改良政策とは異なる実効性をあげ」た。山崎の推薦を得て県立農林学校の教師となった加藤の満蒙開拓は、「侵略主義が『外に失いしものを内に取りかえさん』とする、デンマークの近代精神と正反対のものである」「どんな人々にもおのれのフォルケリーヘズがあるとして、その尊厳を認めたグルントヴィの精神にさからうこと甚だしい」と、フォルケホイスコーレ本来の精神を踏み外したものとして強く批判する。そのうえで、非国粋主義的なフォルケホイスコーレ受容における「内村の正当な後継者」として、賀川と弟子の杉山元治郎

(1885-1964) による日本農民福音学校を挙げている。(清水 1993:180-190)。

小山と清水では、国民高等学校についての評価が分かれるが、共通するのは、非戦論者として知られる内村の『デンマルク国の話』と賀川らキリスト者の国民高等学校受容を肯定的に評価し、古神道へと転換した加藤の満蒙開拓を本来の理念から外れた異物と見なす点である。武田清子もまた、フォルケホイスコーレを、「キリスト教信仰に基いて、人格を養成し、人間の崇高なる精神を鼓舞し、高い人生観、生活観を与える」ことを目的とし、知識の詰込みを批判しつつ、歴史と文学を主要科目とし、「近代の学問、自然科学、(数学、物理等)、政治学等」の習得を目指す「liberal educationの伝統」を持つ学校として紹介する。加藤はその伝統を継承せず、精神の鼓舞、世界観の確立のみを「古神道的日本精神(農民精神)をもって代用」し、教科内容も独断で決めたため、「デンマークのそれとは、教育理念においても、また、教育内容、方法においても異質の、加藤式の農民教育思想であり、実践であった」。(武田 1965:72-73&89)

本稿では、第一に、加藤の国民高等学校受容を内村や賀川のそれと区別する先行研究に対し、日本における国民高等学校運動と満蒙開拓推進運動の組織的なつながりに着目する。二つの運動はメンバーを共有しながら組織的に展開され、日本全国の国民高等学校は満州入植前の開拓訓練所として使用された。一般には良心的なキリスト者として知られる賀川豊彦も、「満州基督教開拓村」を提唱し、自身がフォルケホイスコーレをモデルに設立した武蔵野農民福音学校を開拓訓練所として使い、信者たちを満州に送った。

第二に、加藤の国民高等学校・満蒙開拓を、本来のフォルケホイスコーレからの逸脱とする先行研究に対し、本稿では、フォルケホイスコーレ/国民高等学校と満蒙開拓の共通点と連続性に目を向ける。その際に、北欧文学・ドイツ文学研究の立場から、「理想的」で「幸せ」な北欧の背後にある、日本における受容の媒体としてのドイツにおける受容の存在を指摘する。たとえばスウェーデンの作家セルマ・ラーゲルレーヴ(Selma Lagerlöf, 1858-1940。『ニルスのふしぎな旅』著者。女性初・スウェーデン人初のノーベル文学賞(1909))は戦中戦後の日本で平和主義作家として受容されたが、ドイツにおいてはナチ政権下で人気を博した(中丸 2011)。わたしの研究は、同じ作家、同じ国・地域について日独で正反対の受容がなされた理由への問いから出発した。現在立てている仮説は、日独の受容は同じ根を持つ思想・文化の別の側面だということ、そうした受容は、受容者により歪曲された部分と被受容物が本来持っていた性質を反映した部分の双方を持つということだ。帝国主義・軍国主義・民族主義が「北欧」に求めたものは、現在のわたしたちが「理想的」「幸せ」と捉える北欧像の中にも存続している。本稿では、満蒙開拓を加藤や賀川の「限界」ではなく、善意や有能さ、真面目さといった善き性質の表出ととらえ、彼らにおける満蒙開拓の魅力、必然性、フォルケホイスコーレ/国民高等学校におけるその萌芽を見出すことを試みる。この視点と問いの行きつく先は、「満蒙開拓は善意で行われた」「軍国主義・帝国主義・民族主義にも良い面があった」と結論することでは決してない。満蒙開拓を、現代の視点から、自身と切り離された「悪」として断罪するのではなく、わたしたちが「善きもの」と見なす農業や植林や北欧との連続性を捉え、わたしたちの内なる軍国主義・帝国主義・民族主義を問い直すことである。

2. 国民高等学校受容と満蒙開拓

(1) 加藤完治

加藤完治は、1902年に金沢第四高等学校に入学、在学中に「愛の実現」を課題とする生き方・実践をキリスト教に求めて洗礼を受けた。1909年に東京帝国大学農科大学(現:東京大学農学部)

に編入、農村救済を目指す尚友会に所属する。卒業後、内務省帝国農会嘱託として勤務するが、東京の貧民窟で貧民救済を行った後、山崎延吉の好意で安城農林学校教師となり、農耕を学びつつ「農民」としての生活を開始した。この時期にキリスト教から古神道へ転じた。15年、地方改良運動を背景に、内村の弟子藤井武（1888-1930）の山形県知事への進言で、農村の中堅人物養成を目指す山形県立自治講習所が創立されると、加藤は校長に就任し、22年から23年にかけてデンマークのフォルケホイスコーレを含め海外を視察した。24年には、「朝鮮開発協会」を発足。背景には、自治講習所を修了した農家の次男・三男の農地を確保するために内地植民もしくは朝鮮植民を必要とする考えがあり、発起人には自治講習所卒業生5名も名を連ねていた。加藤は、朝鮮半島で干拓事業を行った不二興業と提携し、25年、自治講習所修了生を中心に朝鮮植民を開始した。同年、「日本国民高等学校協会」が発足した。同会は、27年、「国運衰退ノ極」から半世紀で繁栄したデンマークに倣って茨城県友部に日本国民高等学校を創立し、加藤は初代校長に就任した。同校の目的は、農家経営、農村経営、組合経営、熱風教育、自給自足の伝授であり、長男教育、次三男教育（拓地植民）、少年教育、女子教育（農家の主婦）の四部で構成された。また、山陰国民高等学校、瑞穂精舎、西海農学校、山形県立国民高等学校（山形県立自治講習所が上山農学校と合併）など他の国民高等学校のための教職員も養成した。

1931年に「満州国」が建国されると、武装移民による現地の治安維持が叫ばれるようになった。加藤は、陸軍大臣荒木貞夫（1877-1966）や東京帝国大学総長古在（こざい）由直（1864 -1934）に対し、満州移民の実現に向けた説得を行った。32年、関東軍における満州の産業開発・移民に関する要請を受ける形で、満州移民の中堅人物の養成を目的に、奉天日本国民高等学校分校が創立された。35年、日本国民高等学校は、農林省山林局所轄と満州移住協会の土地の提供を受け、友部から茨城県内原に移転した。「遠大なる理想の下に行わるる大和民族の大陸移動」「五族協和の中核たる大和村を理想として建設」された同校は、「内原訓練所」として、礼拝、学科、教練、武道、農作業など満蒙開拓に向けた2か月の訓練を提供した。成人の訓練の限界から青少年に重点を置く必要を感じた加藤は、37年、「満蒙開拓青少年義勇軍編成に関する建白書」を近衛文麿内閣に提出、これを受け「満蒙開拓青少年義勇軍」（国内向けの名称は「軍」、満州国向けは「隊」）が閣議決定された。渡満した男子は、農業ではなく軍務や軍需工場へ動員された。45年8月の敗戦後、満州開拓移民・青少年義勇軍27万人（実数33万人）のうち、帰国者は14万9千人、未引き揚げ・未調査5万6千人、死亡者8万人。在満邦人の14％を占める開拓民の犠牲者数は、満州の日本人犠牲者数の50％に上った。（武田 1965：84-89）

野本京子は加藤の活動における「内原グループ」、すなわち、加藤完治、「石黒農政」を牽引した農林官僚の石黒忠篤（1884-1960）および小平権一（1884-1976）、政府の審議会・調査委員会委員を歴任した研究者の那須皓（しろし）（1888-1984）および橋本伝左衛門（1887-1977）の5名とその周辺に着目する（野本 2020）。那須は東京帝国大学農科大学で加藤と親交を結び、その後、同大学で教鞭をとった。『デンマルク国の話』単行本版と同年の1913年、アントン・ホルマン『国民高等学校と農民文明』（同志社）を翻訳し、フォルケホイスコーレを初めてまとまった形で紹介、「国民高等学校」という訳語を定着させた。加藤の山形県自治講習所への就任を後押しした一人でもある。京都大学農学部の橋本伝左衛門も東京帝国大学農科大学の同窓である。石黒忠篤は、農林省の重役を歴任し、後に農林大臣・農相大臣も務め、土地制度の改善や農民教育、簡易生命保険の整備など小作問題の解決に尽力し、「農政の神様」と呼ばれた。加藤の海外視察は石黒の資金援助を得て実現した。

小平権一も東京帝国大学農科大学以降、加藤と親しく接した。石黒農政を支え、小作立法や産業組合設立に功績があった。34年には、農林省経済更生部部長として中堅人物養成施設「修練農場」の目的・方針を起草したが、この設立趣旨は日本国民高等学校と近い。41年度で43カ所を数えた同農場は、満州移民の短期修練・臨時修練の場となった。「内原グループ」は、加藤とともに以下の事業の発起人に名を連ねる。「朝鮮開発協会」は、二荒(ふたら)芳徳（1886-1967）、山崎延吉と並んで那須、橋本、「日本国民高等学校協会」は、財閥関係者らと並んで石黒、小平、那須、日本国民高等学校は、5名全員と小出満二(まんじ)（1879-1955/文部省督学官。鹿児島県農林学校や九州帝国大学で教授を務め、農政学者としての活動の中でデンマークの農業も紹介。内村・新渡戸稲造の弟子)、奉天日本国民高等学校分校は那須、橋本、石黒、「満蒙開拓青少年義勇軍編成に関する建白書」は石黒、橋本、那須である。（武田 1965：67 & 野本 2020：10-11, 17）

(2) 賀川豊彦

このように、国民高等学校の導入と朝鮮移民・満蒙開拓は相互に補完しあい、加藤単独ではなく、研究者や農政官僚の綿密な協力の下で進められた。内村自身が興農学校の創立にあたり加藤に助言を求めたのみならず、弟子の藤井が山形県自治講習所の設立に、小出が日本国民高等学校の設立に関わるなど、国民高等学校の受容において、内村および弟子たちと「内原グループ」は協力関係にあった。そして、国民高等学校の導入に尽力した有力なキリスト者には、賀川豊彦がいた。

賀川は、徳島中学校在学中の1904年にキリスト教の洗礼を受け、明治学院予科から神戸神学校へ進学した。スラムで貧民救済活動を行う中、スラムを拡大させないための農山魚村改良を目指し、22年に日本農民組合を結成、各地の小作組合を糾合する（伊丹 2020:42-43）。これを共に結成した杉山元治郎は、26年に結成された労働農民党初代執行委員長を務め、戦後も政治家として活躍した。賀川は農村問題に取り組む過程で、立体農業（山間地・傾斜地の活用）の導入、協同組合保険（現在の農協・生協の共済制度につながる医療・共済制度）の整備と並び、教育に注力した。25年にアスコウ・ホイスコーレを視察した賀川は、27年、フォルケホイスコーレをモデルに、兵庫県瓦木町に農民福音学校を創立した。農閑期の農民青年を対象に、農業、歴史、美術、哲学、立体農業論、セツルメントや協同組合論、聖書についての寄宿教育を行った同校は全国に展開し、最盛期には非常設を含め37校を数えた。32年、賀川は東京祖師谷に武蔵野農民福音学校を創立した。藤崎盛一（1903-98）は農業技術者として賀川の立体農業を支援し、同校の専従を経て、47年に香川県に豊島(てしま)農民福音学校を創立した（82年閉校。現在は有志により「豊島農民福音学校 土曜クラス」が運営されている)。武蔵野農民福音学校では、聖書やキリスト教の知識、教会音楽、宗教論、農民運動論、協同組合論、工芸論、土壌学、肥料学、養鶏、養豚、酪農、果樹栽培、立体農業が伝授された。

1938年、伝道のため満州に赴いた賀川は開拓地を視察し、南満州鉄道のキリスト者のグループと接触、満州宅地行使総裁坪上貞二（1884-1979）らから、キリスト教徒の移民村をつくるよう要請される。帰国後、賀川はこの要請を日本基督教連盟農村伝道部に諮る。この提案は一度見送られるが、39年3月の宗教団体法成立、5月の農村伝道委員会による現地調査を経て、日本基督教連盟は11月に「満州国移民村に関する決議案」を採択した。40年3月に「満州基督教開拓村委員会」が発足すると、賀川は委員長に就任し、同月、満州移民を鼓舞する小説『日輪を孕む曠野』（大日本雄弁会講談社）を刊行した。同年7月の『神の国新聞』では、移民募集の特集が組まれ、賀川、杉山、満鉄調査室嘱託の千葉豊治（1881-1944)、開拓団長

の堀井順次（1904- ？）が文章を寄せた。この時期に堀井は、内原訓練所で（通常2カ月のところ）2週間の訓練を受けている。賀川は8月に陸軍刑法違反嫌疑で渋谷憲兵隊に拘引された。釈放後も公的活動を制限され、満州基督教開拓村委員長を辞任するが、移民の支援は続け、賀川を信じて渡満した信者も多かった。

1940年11月、団員の募集が開始され、武蔵野農民福音学校は「渡満訓練所」となった。「基督教精神をもって国策上の満州開拓村建設にあたる者に、開拓の精神と技術を習得させる」ことを目的とし、国体原理、満州移住論、満州農業論、協同組合論、聖書講話などの課目を設置、賀川も「満州岩石学」を開講した（賀川資料館 2007:XII-XIII）。団員は1か月の訓練を受け、41年2月の第1次から43年6月の第7次までの第一開拓団は長嶺子へ入植した。44年9月に募集開始された第二開拓団は45年4月に太平鎮に入植した。戦局が悪化すると開拓団の男性は招集され、両開拓団は老人、女性、子どもで敗戦を迎えた。引き揚げ待機中の病死、応召者のシベリア抑留を経て、68世帯230名（現地入団・出生含む）のうち、123名が帰国、54名が死亡、43名は不詳である（2007年5月現在判明分）。

敗戦後、手記「斜陽は悲し長嶺子」（『農民クラブ』1949年2月号）の寄稿や東京都民生局援護部への報告（1957年記録作成）をした堀井のような例外を除き、賀川ら関係者が満州基督教開拓村について語ることはなく、本件は長く忘れられた。日本基督教団の「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」（1967）にも本件への言及はない。1980年代以降、戒能信生らの調査や賀川記念館特別展「満州基督教開拓村と賀川豊彦」（2006）などで概要が判明した。（戒能 2007 & 石浜 2007）

(3)　加藤完治と賀川豊彦

加藤と賀川は、組織した開拓団の規模は違うものの、1900年代初頭に十代で受洗し、都市部で貧民救済に尽力し、スラム発生の解決策として農村改良を目指す過程で国民高等学校を導入し、同校を開拓訓練所として満州に開拓者を送るという共通の経過をたどった。先行研究は加藤のキリスト教から古神道への転換を満蒙開拓の根拠の一つとするが、1965年の時点で加藤は「古神道においてキリスト教も本当に生かされる」「汎神論的立場において万物は神の顕現と見、農作物も土も神のあらわれ」と捉えていた（武田 1965:62-63）。

満州移民についての両者の筆致は、たとえば以下のようなものである（旧字は新字に変換）。

> 大和民族の理想信仰――キリスト教や仏教ではやゝもすると、個人から直ちに神に帰一し、安心立命を得るということが起り易いが、大和民族の本来の理想信仰に照せば、各個人は常に、家、村、国家、全世界を通じて神に帰一せんと努力する。しかもその中心点を国家におく――この理想信仰から申しますと、かくのごとき人が、貯金からじりじりと始めて一町か二町の自作農となる事はいたずらに時ばかり多く費やしてもったいないと思う。一方には腕があり、精神が固まっている青年がある、それに他方には利用されぬ国有地や地主の土地が荒れ果てゝいるのを我らは目撃する。さればそれを開放し、こういう若い人のために早く自作農たり得べき道を開いてやらねば、第一陛下に申し訳がない。（加藤（上）:112-113）

> 大和民族の理想信仰は、天照大御神の御延長にまします天皇を中心として、各自が自己の分担を真面目に果たしながら、本来の一心同体を発揚するにある。本来一つのものが、加藤となり、和合となり、諸君となって、各自の分担に徹底するのだ。大日本という大きな生命（いのち）に自分がとけこんでしまったのです。この大生命（だいせいめい）に一切をさゝげるのが忠なんだ。めいめいの農家においては、家長を中心として孝をなすことが、同時に忠となるのです。（加藤（下）:238）

村という大生命は、その村に住む人とか、土地とか、樹木とか、あるいはその村の歴史などによって表現されているのであるが、この大生命こそ永遠に栄えてゆくべきもの、また栄えさせねばならぬものである。(加藤(下):253)

満州の広野は日本人の来るのを待つてゐる。茫々千里、無住地区だけでも、日本の耕地面積の四倍位はあるだらう。

昔アブラハムはカルデアのウルの都をすてゝ、その行くべきところを知らずして出発した。彼は新しき国家を建設し、新しき民族の始祖となるために、メソポテミアの草原を彷徨したのであつた。そのアブラハムの血を承けつぐ我らは北満の広野に、理想的郷土を建設せんとしてゐる。[中略] 無住地帯に漢民族との衝突を避け、蒙古人種である日本人が移住するのに何の遠慮がいるか。祖先が出てきた地方にもう一度帰るだけのことである。[中略]

鉱業満州がいくら発達しても農業が進歩しなければ日本の生命線となることはできぬ。

土を愛するものでなければ国土を愛するとは言へない。日本民族の一大問題は過剰人口の処分である。日本の農民の七割は小作人階級である。

この小農を満州に移して日本海を挟んで日本民族が発展して行くことは天の許し給ふ御旨であると信ずる。

我らは五族協和の精神をもつて宇宙の創造者を天、父と信じ、世界各国の諸民族を神の子と信ずる [中略] もし満州国に於て五族協和の精神が達成出来なければいづこの国に於て出来るだらうか。満州国に於ては白系ロシヤ人ありユダヤ人あり、朝鮮人あり、蒙古人あり、半島人まで加へれば満州は実に珍しいところである。

キリストを愛するものにして始めて大満州国の建国の精神を把握できる [中略] 十字架の血に燃ゆる日本の農村青年よ。集れ、そして新しい日本建設に参加せよ。[中略] これを証明し得るものは実践にある。福音の実践力を証明せんとするものは我々の運動を助けよ。(賀川1940:3／インデントは原文ママ)

こうした例からは、両者の違いもうかがえる。加藤は「大和民族の理想信仰」をキリスト教や仏教のそれと対比し、神に帰一する中心点に「国家」を置くが、賀川は終始キリスト教を軸に満蒙開拓を鼓舞し、「陛下」を持ち出すことはない。「国家」を通じて神に帰一する加藤と、「キリストを愛する」ことを「大満州国の建国の精神を把握」することの前提と捉える賀川では、キリスト教の位置づけはもちろん、信仰および神という形而上学的な問題と、国家建設という形而下的な問題への対処の順番が異なる。賀川の「五族協和」強調に対し、加藤の筆は「大和民族」のあるべき姿に割かれる。一方両者は、小作問題の解決を強く叫ぶ点、土地不足解消の切り札として満州移民を推挙する点、満州を「利用されぬ」「無住の」広大な土地とする点は一致している。さらに、農村や「大日本」を一つの「生命体」と捉え、広大な土地における農業を通じてその生命体に帰一できるとする加藤と、農業の発達をもって日本の生命線と成し、「宇宙の創造者を天、父と信じ世界各国の諸民族を神の子と信ずる」「五族協和の精神」の実践を満州移民に求める賀川は、その宇宙観と実践としての農業の位置づけにおいても相似形をなしている。

3. 北欧受容としての植民と植林

(1) ドイツ語Volkとデンマーク語folk

以上のように、加藤と賀川は実践と理論の双方において国民高等学校と満蒙開拓を結び付けた。ではその原因は、「英米独の文献経由」の受容に

より、フォルケホイスコーレの理念が正しく理解されなかったことにあるのだろうか。

たしかに、国民高等学校は民族主義期のドイツを介して導入された。また、武田はフォルケホイスコーレと加藤の国民高等学校の違いに触れた後、加藤が、あるフォルケホイスコーレの校長の「『吾々は小農の指導者ではなくて、彼らの僕（servant）だ』という」言葉に「反発しており、『指導者』と繰り返し強調しており、こうしたデンマーク精神よりもドイツ国民の「祖国の為めに」の一語にすべてのものが結集する愛国の至情に燃えたドイツ魂に深い感動と共鳴とを覚えている」（武田 1965:72-73）と指摘する。国民高等学校の基本書となったホルマン『国民高等学校と農民文明』も原著はドイツ語著作A. H. Hollmann: *Die dänische Volkshochschule und ihre Bedeutung für die Entwicklung einer völkischen Kultur in Dänemark*. Parey, 1909である。直訳すると「デンマークの国民高等学校と、デンマークにおける国民文化発展にとってのその意義」であるが、ここで、那須によって「国民」と訳されたドイツ語の名詞Volk（フォルク）とその形容詞形völkisch（フェルキッシュ）に言及する。

ドイツ語のVolkは、国民Nation、市民Bürgerに対し、「民衆」および「民族」という意味で使われる。18世紀後半以降、ドイツ・ロマン主義運動の中で、領邦国家統一と国民国家成立の希求から出てきた概念で、辞書Dudenの第一の意味は「同じ文化、歴史（、言語）で結ばれた人間の共同体」である。同運動においては、統一国家のアイデンティティを担保するものとしての言語を研究する過程で、同じインド・ヨーロッパ語族ゲルマン語派で、かつ、ゲルマン祖語の形を残す北欧語に強い関心が寄せられた。古い形の残存は、その言語が古い形を失った言語の先祖であることを意味せず、語族の同系統性は血統のそれを表さないにもかかわらず、北欧やドイツを理想的な民族「アーリア人」とする言説が形成された。völkischは、「Volkの」という意味の形容詞で、19世紀初頭以降、特にナチ時代に、人種主義、反ユダヤ主義の文脈で使われた。適切な訳語がないため、現在のドイツ学においては「フェルキッシュ」とカタカナ書きされる。この概念は、ナチ思想の根幹の一つ「血と土」思想とも結びつく。ドイツ帝国成立（1871）後の急速な近代化を受け、反近代、反資本主義、反自然主義の立場から、営農中産階級を支持層として「大都市芸術」の対概念としての「郷土芸術」を目指す運動が勃興し、北欧は急速に都市化・工業化する近代ドイツが失った牧歌を担保する場所として理想化された。この運動は、第一次世界大戦後、「血と土」思想へと展開する。「血」は血統、「土」は農地を意味し、「血の純粋性」の維持を重視する観点から、土地を世襲する農民の称賛と、ユダヤ人やシンティ・ロマ、障碍者、同性愛者の排除の根拠となった。「血と土」を人口に膾炙させたリヒャルト・ダレー『北方人種の生命の源としての農民』（独 1928/岡田宗司訳『民族と土（上）』橘書店 1942）や『血と土の新貴族』（独 1930/黒田礼二訳『血と土』春陽堂書店 1941）は、国民高等学校導入よりも後に刊行され、Volkなどの捉え方も時代や文脈、人によって異なるため、ホルマンの用語とナチの歴史の比較には慎重さが求められる。しかし、那須が「デンマークにおけるフェルキッシュな文化」を「農民文明」と意訳したのはまさに、ドイツの民族主義において、北欧の農民がフェルキッシュな文化における理想形と捉えられる文脈においてであった。ホルマンは、キリスト教と民族について「其の国民的文化を棄てずして基督教を探り、時を追うて之れを其の固有の文明中に相融合せしめたゲルマン北都人民は歴史上主たる民族である。如何となれば此の国民は自己の文明と基督教との融和を其の民族固有の技量に従って果し得たからである」（56-57）とゲルマン民族の優位を説いたうえで、土着信仰とキリスト教が融和する姿を、国民高等学校の理想の一つとして提示している。

それでは、民族主義や北欧の理想化はドイツ特

有であり、デンマークのフォルケホイスコーレは無謬なのだろうか。デンマーク語のfolk（フォルク。合成語ではfolke（フォルケ））、その形容詞形folkelig（フォルケリ）、その形容詞を名詞化したfolkelighed（フォルケリヘズ）を軸に検討する。

田渕宗孝は、近年の研究において、グロントヴィの政治的側面に光が当てられ、その「旧体制に対する信頼、憲法や議会制に対する懸念、ひいては民主主義に対する懐疑を論じる」「一般的に広く受容されている『民主主義の起源』としてのフォルケホイスコーレおよびグロントヴィ」の像が批判されつつあることを指摘する。そのうえで、folkが英語でpeopleと訳されることで、「『自由であり、かつ共通善に対して自己の利益はわきに置いておく』というような牧歌的な人間のイメージがfolkおよびfolkelighedの特徴とされ」、その言葉の持つ民族性が捨象されることを指摘する。ドイツ・ロマン主義の影響下にあったグロントヴィは、「学問性」とは「人間的精神の調和的発展」であると主張し、フランス革命をそれらを阻害するものとして批判した。それらを取り戻すためには、「実際の宗教的な心情、天なる者に対するゆるぎない信仰、そして聖性への直感（Ahnelse）」を回復させることと同時に「牧歌的で夢想的な宗教的調和の世界に沈殿することで『現在おかれている場所を忘れたくなるような誘惑』に陥ることの無いよう、『生に満ちた北欧（Norden）を見渡す』こと、そして『国民（Nationen）のなかに学問的な声』を届かせる」ことが必要である。そのために、大学は「学問の真の養成所」でなければならない。宗教と感情の「声」を聴けるように覚醒することが、「フォルクの啓蒙（folkelig Oplysning）」であり、グロントヴィはその覚醒と啓蒙に向けて「自民族の文芸である北欧神話を執筆し、また母語である北欧語の重要性を主張」した。（田渕 2018: 40-42）第二次シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン戦争敗戦により、「グロントヴィ主義はそのナショナリズム的高揚とともに一気に農村に広ま」り、フォルケホイスコーレが急増する。19世紀の国民国家形成の過程では、フォルケホイスコーレの教育、穀物生産から酪農への転換による国際競争力の強化、協同組合の形成、国家や他の階級に対抗する明確な政治力の組織により、「教養市民層にかわる新たな国家主権者としての、リベラルで民主義的傾向を持つ農民階級」が形成された。（田渕 2005: 81-83）

グロントヴィのfolkは、ドイツ語のVolkと同様、土着宗教や母語を重視し、民族主義や農民賛美の側面を有した。もちろん、それらとナチズムや満蒙開拓との関連づけには慎重さを要するし、帝国主義時代のデンマークが新たな外地植民をしなかったのも事実である。一方、グロントヴィが属すナショナル・ロマン主義は「海上帝国」デンマークの小国化に伴って高揚した。最初期のフォルケホイスコーレはドイツ文化の影響の強い北シュレスヴィヒのデンマーク化を目指して創立された。第二次シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン戦争後に同地がプロイセン領になると、65年に新しい国境付近のアスコウ（Askov）にホイスコーレが創立された。加藤、賀川、平林、松前は、いずれも同ホイスコーレに留学した。フォルケホイスコーレの展開は、プロイセンを（仮想）敵とするナショナリズムとも、ドイツの民族主義と基盤を共有するデンマークの民族主義とも無縁ではなかった。

加藤と賀川が同じ文化や歴史を有する共同体を民族として重視し、民族の覚醒と農業を結びつけること、賀川が満州を祖先の出身地と見なし、移民を「理想的郷土」の建設と捉える視点、加藤が古神道によって外来の宗教としてのキリスト教を理解する姿勢は、いずれも、彼ら独自の思想としての側面とともに、グロントヴィのフォルケホイスコーレとの親和性も抜きがたく有している。「三愛精神」の「祖国」が、賀川において「国土」、現代において「土」となった過程もまた、今後、「血と土」思想の内面化として考察される可能性がある。

(2)　内村鑑三『デンマルク国の話』

国民高等学校の理想の中に軍国主義・帝国主義・民族主義の芽があったとすれば、その発芽を防ぐ術はあったのだろうか。あるいは、その萌芽はどこにあったのか。大きな問題であり、残りの紙幅で答えを出すことはできないが、考える手がかりとして『デンマルク国の話』に立ち戻る。

村井誠人は、北欧受容における同作の過大評価を疑問視し、史実との違いを指摘する。たとえば「外に失ひし所の者を内に於て取返すことが出来る」（内村 1913: 14）はダルガスではなく詩人ホルスト（Hans Peter Holst, 1811-93）の言葉である。この言葉は平和主義の体現と捉えられ勝ちだが、デンマークは普墺戦争（1866）・普仏戦争（1870）への参戦によるプロイセンからの土地奪還を模索し、ダルガスは生涯軍籍にあった。ヒース地帯の開墾は全ヨーロッパで行われ、デンマークでも敗戦による失地以前に開始された。開墾に功績があったのはダルガスを会長とする「デンマーク・ヒース協会」である。（村井 2010: 93-97）これらの指摘は、前述した北欧の理想化や「土」への捉え方とも合致する。

内村は米雑誌『マックリュアー』37巻3号（1911）に掲載されたヘンリー・リーチ（Henry Leach, 1880-1970）の「荒野の再生。デンマークは如何にして荒野を農業国に変えたか」（Reclaiming the Heath. How Denmark Converted a Desert into a Farming Country）を通じてダルガスの植林を知った（鈴木 2012: 174-179）。内村がリーチにない聖書の逸話を挿入すること、リーチが詳述する「デンマーク・ヒース協会」の活動を捨象し、植林を父と息子の物語として書くことで「血統」のモチーフを提示することも興味深いが、ここで指摘したいのは、Reclaiming the Heathが植林の前提となる「ヒースの駆除」を含意することだ。Heathは、植物「ヒース」もしくはヒースの生えた「荒野」を表す。Reclaiming the Heathでは、木が伐採され、森がヒースの荒野に置き換わったデンマークの歴史や、ダルガスがヒースを駆除する過程に紙幅が割かれている。「流水はヒースの死だ」（Leach 1911: 279）という直接的な表現もある。リーチは内村の「千八百六十年に於てはユットランドの山林は僅かに十五万七千エークルに過ぎませんでしたが、四十七年後の千九百〇七年に至りましては四十七万六千エークルの多きに達しました」（内村 1913: 25）に相当する数字を挙げ、ヒース協会創立後に森林面積が3倍以上になったことを指摘した後、以下のように記述する。「併せて記憶されるべきは、植林はヒースを開拓する（reclaime）いくつかの方法のうちの一つにすぎないということだ。ユトランドの非生産地域は、1860年に2860平方マイルだった。それが1907年にはたった1428平方マイルだった。つまりヒース協会の活動の最初の40年で、ユトランドの荒れた土壌の半分以上が耕地に変わったのである」（Leach 1911: 286）。内村は、植林による国土復興に光を当てることで、その前提となるヒースの駆除を不可視化する。この手法は、実際には人が暮らしている満州を「無住の地」とした言説と、どこかで交わらないだろうか。

基督教開拓村の団員は、渡航後に満州が「無住の地」ではないことを知る。「現地住民を立ち退かせた家に住み、その農地を生活の基盤とする現実それこそが、嘉之が逃れたかった社会構造ではなかったか」（坂井嘉之の甥坂井虔の証言）、「開拓団では現地民の土地を取り上げて入植していた。土地はきれいに耕してあった。［中略］力ずくではないにしろ、聞いた話とは違う」（炭本治和雄の義妹炭本節子の証言）しかし、内地に生活の術はなく、引き返すことはできなかった。（石浜 2007:23-24）

『デンマルク国の話』、植林、国民高等学校/フォルケホイスコーレ、「理想的/幸せな北欧」は、現在も「善きもの」として受容されている。その背後に、おそらく今も不可視なまま駆除され続けるものが存在することを指摘して、本稿の結びと

する。

※本研究は、JSPS科研費JP19K00532の助成を受けたものである。

【引用文献】

伊丹謙太郎「賀川豊彦と農村、そしてデンマーク」『賀川豊彦研究』第68号（2020）41-50頁
内村鑑三『デンマルク国の話』、聖書研究社 1913
賀川豊彦「満州基督教開拓村に勇敢に参加せよ」『神の国新聞』1940年7月10日号3頁
賀川資料館『改訂版　満州基督教開拓村と賀川豊彦』2007（収録：戒能信生「知られざる教団史の一断面」7-10頁／石浜みかる「満州キリスト教開拓村に至る道・団員の証言」11-34頁）
久保田治助・木村陽子「戦後始発期の国定教科書にみる学校教育像」『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』23巻（2014）251-256頁
加藤完治『加藤完治全集第四巻』（上）（下）加藤完治全集刊行会事務局、刊行年記載なし
清水満『生のための学校（改訂新版）』新評論 1996
鈴木範久『内村鑑三の人と思想』岩波書店 2012
武田清子「加藤完治の農民教育思想」『教育研究』11号（1965）47-103頁
田渕宗孝「ナショナリズムを語ることとデンマーク・フォルク論」『社会文化研究』第8号（2005）72-91頁
田渕宗孝「グロントヴィとフォルク」『北ヨーロッパ研究』第14巻（2018）37-44頁
中丸禎子「ドイツ民族主義と北欧」『詩・言語』74号（2011）1-16頁
野本京子「日本の「満州」農業移民政策の思想的系譜」『Quadrante』No. 22（2020）9-19頁
村井誠人「『外に失いしものを、内にて取り戻さん』孝」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第4分冊56号（2010）93-111頁
Henry Leach: *Reclaiming the Heath. How Denmark Converted a Desert into a Farming Country*. In: MxClure's Magazine XXXVII, May 1911, p. 273-287.

【引用サイト：最終閲覧日2021年10月31日】

小山哲司「神を愛し、人を愛し、土を愛す」(初出:『水戸無教会』178号、2000) http://www.asahi-net.or.jp/~pv8m-smz/archieve/Gott_Mensch_Erde1.html
folkehojskole公式HP　https://www.hojskolerne.dk/
Duden https://www.duden.de/rechtschreibung
IFAS公式HP　https://www.ifas-japan.com/folke/
World Happiness Report 2021 https://happiness-repot.s3.amazonaws.com/2021/Appendix1WHR2021C2.pdf